

正当なソプラノ……

美しく響き行く歌声は心の隅々を暖めた

二葉あき子の透き通るような美声は

戦後復興に汗した

日本人への讃歌であった

文 山川智

日本の女性の恋心とは

この歌詞のようであったのか

へ君に逢ううれしさの 胸に深く  
水色のハンカチを ひそめる習慣が

心の壁を震わせた円熟35歳の

ソプラノのあまりにも美しい声音は

染み入るような抒情となつて揺らめきなびいた

歌なかの、そんな女性に男たちは憧れた

歌なかの、そんな女性との恋を夢見た

唄う彼女は幻影の恋人だった

が、二葉あき子のソプラノは長く続かなかつた

それから5年、高音を失つた

高音の出ない自分は無用……

失意のなかで自死を求めた

服部良一は高音にこだわるあき子を叱つた

あき子は低音発声法に取り組み我がものとした

キーを落としたしつとり落ち着いた美声は

新たな『水色のワルツ』を聞かせてくれた

広島二葉の里、安芸を芸名とした加藤芳江は

多くの美しい歌を残した歌手だった



## 昭和歌謡 誕生物語 【第27曲目】 — 水色のワルツ —

二葉あき子

昭和25年(1950)に発売された二葉あき子の大ヒット曲、それが『水色のワルツ』だ。作詞は藤浦洸。作曲したのは平成18年(2006)に102歳で亡くなった高木東六だった。ただ、クラシックの作曲家だった高木はヨナ抜き(シとファを抜いた)の歌謡曲を「あんなものは乞食歌だ!」と公言。ところが、そんな彼が疎開先の信州で天竜川の畔を散歩中に浮かんだこのメロディが歌謡曲として大ヒットするのだから、世の中はわからない。

二葉あき子は広島出身。以前、何かの取材の折、広島でたまたま立ち寄ったスナックで、二葉の出身校(広島県立広島高等女学校)の後輩という、豪傑ママさんにお目にかかったことがある。

「あき子さんは東京の音楽学校を卒業して、地元の三次高女(現広島県立三次高等学校)の先生になつたんじゃ。学校用教材のレコードを吹込んだところ、レコード会社の目に留まってな、コロムビアの専属となつたんじゃと聞きました」

『愛の揺り籠』でデビューした二葉は『あの夢この夢』『月に踊る』などを立て続けにヒット。戦時下の昭和18年(1943)、結婚して一男をもうけるが離婚。そして、あの忌まわしいの目やってくる。

「里帰りするんで芸備線で広島へ向

かっとなって、トンネルに入った瞬間、ピカドンが落ちたんよ……。間一髪、少しでもタイミングがずれていたら命はなかつたじゃろうなあ」

幸いトンネル内だったため、被ばくはしたものの、一命を取り留めた。昭和20年8月6日のことである。

昭和30年(1955)には高音が出なくなり、それを苦に自殺を図ったこともあったが、服部良一に「高音だけが歌じゃないだろう!」と励まされ、独自の低音発声法を習得し、復帰。

歌手を引退したのは故郷の広島で静かに暮らしたというが、平成23年(2011)8月、心不全のため広島市内の老人健康施設で死去。96歳だった。

「二葉さんは晩年まで『フランチェスカの鐘』を唄つとつた。あれは原爆犠牲者への鎮魂歌なんじゃ。もしかしたら、自分だけ生き残つたことで、罪悪感みたいなものもあつたんかのう……。そう考えると辛いもう」

流麗で繊細なメロディと清冽な抒情性ある歌詞が印象的な『水色のワルツ』。だが、それを歌う彼女の心のなかに、複雑な思いがあつたのかもしれない。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 J-YJを行く』(共にイーストプレス)、『ビューティドキュメント 幸せのきずな』(リーブル出版)など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』(スターツ出版)、『デキる社員』(狂食ギヤル)共にイーストプレスなど多数。